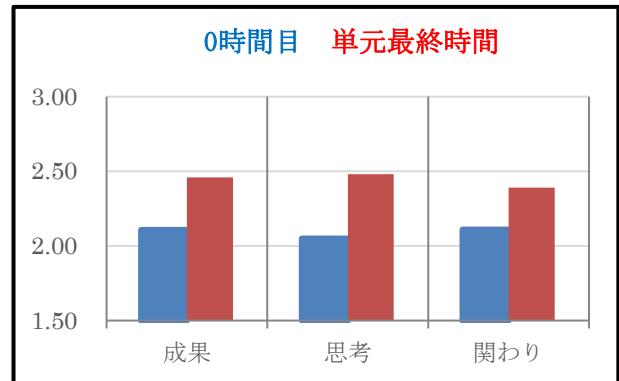
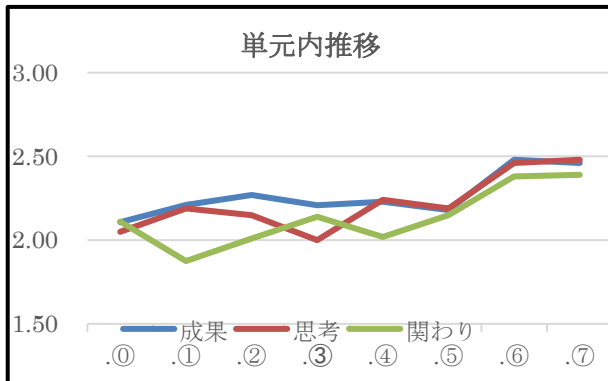


1 単元名 ジャングル探検レッツゴー!!!

(器械・器具を使つての運動遊び・鉄棒を使った運動遊び)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から) 男子15名 女子13名 計28名



- ・「成果」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。簡単な体ならし運動ができるようになったり、逆上がりを補助具ありでできるようになったりした児童が増えたからだと考える。6時間目に高い数値を記録したのは、自分が設定しためあてに向かって、友達からのアドバイスをもらいながら取り組むことで達成できた児童が多かったからではないかと考える。
- ・「思考」も単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。知識・技能の習得に重点を置いた単元前半は低い数値だった。これは、自分に合った活動の場を選ぶこともなく、自分のめあてがあるわけでもないからである。思考をはたらかせる学習を重視した単元中盤～後半は数値が高くなった。これは、教師が思考をはたらかせるための学習を意図的に設定したことで、児童も自身の課題を解決するために思考しながら練習に取り組むことができていたと考えられる。
- ・「関わり」も単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。1～4時間目までは、全体で共通課題に個人で取り組む時間であったため低い数値である。5～7時間目は、課題が同じ友達と関わり合いながら、友達と共に試行錯誤しながら学習できたことで、数値が高くなったと考えられる。そして、7時間目では、最初の異質グループで見合うことを通して、お互いの伸びを認め合えたことがうかがえる。

(2) 技能面

	①足抜き回り (スムーズに回れるか)			②布団干し (脱力して揺れているか)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	10	14	4	15	10	3
単元後	15	12	1	18	8	2

	③つばめ (顎が上がり、肘とつま先が伸びているか)			④水飲みつばめ (体を引き起こせているか)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	11	16	1	6	10	12
単元後	16	12	0	14	11	3

	⑤ダンゴムシ (持久懸垂) (鉄棒を引き付けられるか)			④前回り下り (棒下より後ろで着地できるか)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	12	9	7	6	9	13
単元後	17	8	3	15	9	4

- ・単元前と比較して数値の上昇が見られる。逆上がりで必要とされる力を習得するために、毎時間の体ならし運動を「お話鉄棒」として常習化したり、サーキット形式で行ったりしたことが、技能向上の一要因として考えられる。また、単元後半の課題解決学習の際に、自分の課題解決のために効果的な練習方法や場を選んで練習できたことがうかがえる。
- ・一年時に「ダンゴムシ」と「水飲みつばめ」を習得できなかった児童にとっては、鉄棒を引き付けることや手首をかえすことができないため、逆上がりは難易度が高かったと考える。そのような児童を支援するためにもお話鉄棒やサーキット運動を導入した経緯がある。

(3) 思考面

問 逆上がりの演技を見て、よい所を書こう。(複数回答可)			
単元前		単元後	
・勢いがある	8	足を上に上げている	1 1
・おなかを鉄棒につけている	5	肘が曲がっている	1 0
・足に力が入っている	2	おへそを見ている	9
・足が上がっている	8	手首を返している	7
・肘が曲がっている	3	おへそを鉄棒に近づけている	5
・はやい	2	勢いがある	3
・つばめができています	6	つばめができています	3
・回っている	3	地面を蹴っている	2
・手が離れない	2	トトンのリズム	1
・蹴っている	6		
・おへそを見ている	3		
・トトンのリズム	1		

- ・児童が技能ポイントを学習したり、継続して技能ポイントを確認してきたりした成果である。
- ・児童が技能ポイントを意識して、自己の課題解決に向けて必要なことを考えながら学習することができた成果だと考える。

3 成果と課題

高学年のめざす姿

見合い、伝え合う活動を通して、自分のめあてに向かってくり返し取り組む児童

【成果】

- ・単元前半に技能ポイントを見つけて、全体でそれを意識して取り組む。後半は、自分のめあてに向かって取り組む。その際に友達のアドバイスを活用する。この単元計画の工夫が技能向上に効果的であった。
- ・単元前半は学び方の素地をつくるために異質グループで、単元後半は同じような技能段階で活動させるために等質グループで活動した。単元前半は技能差に関係なくアドバイスをすることができているグループが多く見られた。単元後半は似たような課題をもっている者同士でより具体的なアドバイスをすることができている児童が多かった。
- ・体ならし運動の「お話鉄棒」と「サーキット運動」を取り入れたことで、本単元の逆上がりにつながる素地をつくることができた。

【課題】

- ・友達の演技と技能ポイントを見比べてアドバイスをすることは難しかった。例えば、友達のめあての「足を上げる」が「できているか」「できていないか」を伝えるだけでも良いと感じた。
- ・練習方法や場を見つけることは難しかったので、教師が児童に合った練習の場を示してあげた。
- ・サーキット運動中には、アドバイスをしあうことは難しかったため、等質グループの際で行う自分のめあてに向かって取り組むときに変更した。
- ・アドバイスの内容は、一緒に数える、オノマトペを使った声を掛けるでよいと感じた。